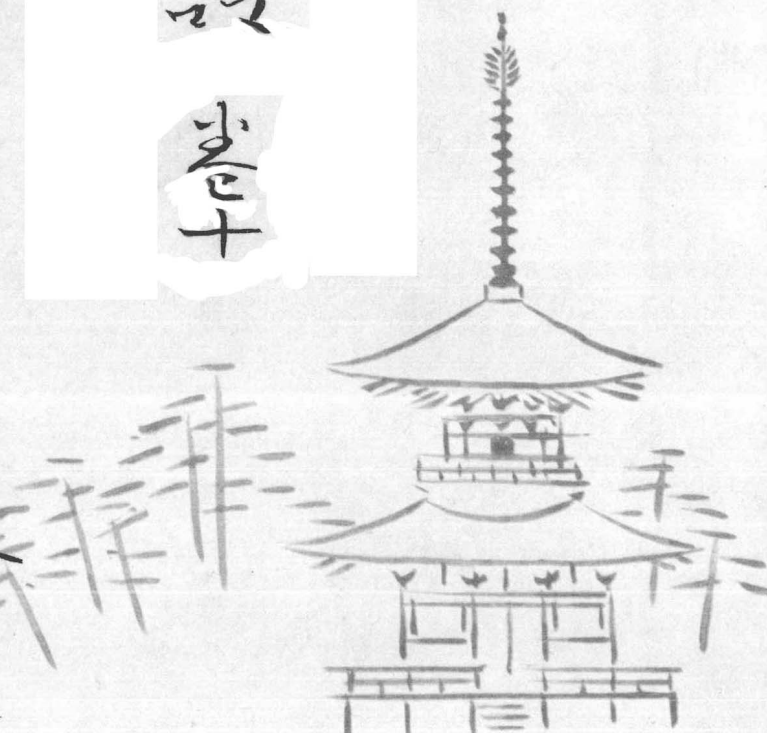
谷崎潤一郎

新々訳 源氏物語 巻十

谷崎潤一郎

新々訳源氏物語 巻十

中央公論社



新々訳源氏物語巻十奥付
昭和四十年九月十日印刷　昭和四十年九月二十日発行
訳者谷崎潤一郎　発行者宮本信太郎　印刷者高橋武夫
発行所中央公論社東京都中央区京橋二丁目一番地
定価四八〇円

巻十目次

浮舟……三
蜻蛉……八一
手習……一四五
夢浮橋……二一九

插

画

前

田

青

邨

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

浮舟

1、中姫君

宮はいまだに、あの誰とも知らずほのかに御覧になりました夕暮のことを、お忘れになる時もありません。そうたいそうな身分というのではなさそうに見えたけれども、人柄が純で愛らしかったものをと、婀娜めいたお心には、何事もなくて済ましておしまいになりましたのを、悔しくお思いになりまして、どこかへ隠したのであろうと、こんなつまらないことからお[1]ん方をまで、嫉妬深い仕方のようにむやみにお憎みになるのでした。そして、「あまりなことをなさるのですね」と、恥かしめたりお恨みになったりなさいますので、そのたびごとに女君はたまりかねて、いっそほんとうのことを申し上げようかとお思いになるのですけれども、しかしせっかく大将の君が、御本妻のようなお扱いはなさらないにしてからが、並々ならぬお志をお寄せなされて、匿っておいでになるお人のことを、餘計なおしゃべりをしてお話し申したとして、さてそのままにお聞き過しにはなら

ないであろう、お側に侍う女房たちの中にでも、ちょっと冗談をしかけてみたくおなりなされた者などがあると、根気よく追いかけて、場所柄をも顧みずその女の里までもお捜しになるという、体裁のおよろしくない御性質でいらっしゃるのに、ましてあれからこっち、随分と月日がたったのに、あんなにも思い込んでおいでになるお人のことであるから、きっとみっともない間違いをお起しになるであろう、それも、餘所からお耳へはいることがあるのはいたし方もない、大将の君にもかのお人にもお気の毒なことにもなろうが、端からお止め申してもお聴きにならないお方であるから、そうなった場合は、ほかの方々とは違った事情にある私が、人一倍外聞の悪い思いをするだけのことだ、いずれにしても、自分の油断から事を破さないようにしようとお考え直しになって、お気の毒のようですけれども宮には知らしてお上げにならず、そうかといって、お口上手にはぐらかすようなことはおできになりませんので、じっと押し黙って、普通の焼餅やきの女になりすましておいでになるのでした。

かの大将の君は、たとえようもなく悠長に構えていらっしゃって、さぞ待ち遠しがっているであろうと、いとおしく思いを馳せておいでになりながら、窮屈な御身分のことですから、しかるべきついでがありませんと、ちょっとはお通いになれませんのを、「神のいさむる道」にもまして困っておいでになるのでした。でも、まあそのうちには仕合せなようにして上げよう、もともと山里へ

イ、恋しくば来てもみよかし千早ふる神のいさむる道ならなくに〔伊勢物語〕

ロ、最初に宇治へ通い出した動機、すなわち故八宮を法の友として慕っていた道心をさす

行った時の話相手にというつもりだったのであるから、しばらく逗留していられるような口実を作って、ゆっくり逢いに出かけてもみよう、そして、当分の間はあそこを人に知られない隠れ家にして、だんだんとそういう風にかの人の気持をものんびりさせておいて、自分も世間から非難を受けないような風に、穏かに運んで行く方がいいであろう、さもなくて、「まあ突然に」とか、「相手は誰だろう」とか、「いつからだろう」とか聞き咎められるのは、うるさくもあるし、最初の考えとも違って来る、それにまた、宮のおん方がお聞きになるところを思っても、由緒のある土地から未練げもなく連れ去って、昔を忘れたように振舞うのも、はなはだ不本意なことだからなどと料簡しておいでになりますというのも、例のあまりにも悠長過ぎていらっしゃるせいなのでしょう。しかし、いずれは京へ迎え取る用意をして、内々で普請をさせていらっしゃいます。少しは何かの御用事も忙しくおなりになりましたけれども、いまだに宮のおん方のために怠らず面倒を見てお上げになりますことは、以前と同じようなのです。疑いの眼でお眺め申し上げる人々もありますけれども、ようよう世の中というものが分っていらしったおん方は、君のなさり方を見たり聞いたりなさいますにつけても、亡き姉君の縁につながる私にさえもこのように尽くして下さるとは、これこそほんとうに、いつまでも昔を忘れない気の長さで、さりとは類ないお志よと、さすがに感動なさらずにはいらっしゃれません。追い追い年をお召しになるに随って、人品と申し、声望と申し、並々なら

ぬお方におなりなされたのに、それに引きかえて宮のお心のあまりにも頼りないのを見せつけられ給うおりおりは、自分は何という不仕合せな宿世であったのか、故姉上が取り計らって下すったようにはならないで、こういう苦労や気がねの多いあたりに縁を結んだとはと、お思いになる折々も多いのです。が、そういってもかの君に対面なさいますことはむずかしいのです。あれから年月も隔たり、昔のことになってしまったのですから、身分の低い普通の人間ならばそういう風な由縁を尋ねていまだに親しく出入りをするというようなこともふさわしいだろうが、何でまあかような貴いお人たちが、並みはずれたお附合いをなさるのだろうなどと、内々の御事情を深くも知らない女房たちに、言われたり思われたりなさいますのも気が引けますし、宮が絶えず疑っていらっしゃいますのも、いよいよ心苦しいし、それやこれやをお考えになりますところから、自然餘所々々しくなって行くのでしたが、君の方ではそれでもなお、昔の心持を変えずにいらっしゃるのでした。

宮も浮気な御本性からは、おりおり歎かわしいお仕打ちをなさることもありますけれども、若君がたいそう可愛らしく大きくおなりになりますにつれて、ほかにはこういうものを生んでくれる人もなさそうなと、大切にお思いなされて、気の置けない、親しめるお人としましては、今一人のお方よりもいとしゅうして上げていらっしゃいますので、女君も一頃よりはいくらか落ち着いて暮しておいでになります。正月の元日が過ぎた頃にお越しになりまして、一つお年をお取りになりまし

イ、夕霧の六の姫君、匂宮の北の方

ロ、薫二十六歳

ハ、上を薄様で包んだ文で後朝の艶書などに用いるもの
ニ、籠の編み残した部分が鬚のようになっているもの。多くは竹製であるが、これは金属製らしい
ホ、白い紙で縦に包んだ文で、正式の書状に用いるもの

た若君をあやしながら遊んでいらっしゃいます昼つかた、小さい女童が、緑の薄様で包んだ包文の大きなのに、小さい鬚籠を小松につけたのと、別にもう一通、四角ばった立文とを持って、遠慮もせずに走って参ります。そして女君に差し上げますので、「それはどこから来たのか」と宮がお尋ねになります。「宇治から大輔の君にと申して、使いの人が持って参りまして、勝手が分らずにうろうろいたしておりましたので、いつものように上が御覧になりますことと存じまして、私が受け取って参りました」と、そう言ううちも息をせいせい弾ませて、「この籠は金で拵えて、彩ったものでございますね。松も大層よく似せて、本物の枝そっくりに作ったものですって」と、にこにこしながら言いつづけますと、宮もお笑いになりまして、「どれ、私にも見せておくれ」と、お取り寄せになりますので、女君はひどく苦々しそうに、「それは大輔におやりなさい」とおっしゃるのでしたが、お顔を赧くなさいましたのを、宮は御覧になりまして、もしや大将の君が何気ないようにして寄越した文ではないであろうか、宇治からと言って来たのなども、何だかそれらしいところがあるとお気づきになりましたので、その文を取っておしまいになりました。しかしさすがに、いよいよそうであった時はと、照れ臭いので、「開けてみますよ。後で文句をおっしゃらないで下さいよ」と仰せになりますと、「みっともない。女房同士が取り交す内証の文などを、何で御覧になりますのでしょう」と仰せになるのでしたが、格別お騒ぎになるような風でもありませんので、

「では見ますよ。女房たちの文の書きようは、どんな風なものなのか」とお開けになりますと、たいそう若やかな筆蹟で、「御無沙汰申し上げておりますうちに、年も暮れてしまいました。山里は何かとうっとうしく、峰の霞の晴れる暇もなくて」とありまして、端に、「どうぞこれを若君のお前に。つまらない品でございますが」と書いてあります。格別巧みなところも見えないのですけれども、誰が書いたともお心当りのない手なので、訝しくお思いになりながら、今一つの立文の方を御覧になりますと、いかさまこれも女の手で、「新しい年が参りましたが、いかがでいらっしゃいますか。御自分様にも、さぞおめでたいお喜びごとが数々おありでございましょう。こちらはたいそう結構なお住居で、気分がしんみりと落ち着きますが、それでもやはりふさわしからぬように存ぜられます。こんな具合にくよくよしてばかりお暮しになりますよりは、ときどきそちらへお伺いになって、お気晴らしをなさいましたらと思うのでございますけれども、あの恥かしい、恐ろしい目にお懲りなされて、気が進まないと仰せられて、お歎きになっていらっしゃいます。若君のお前にとおっしゃって、卯槌を進上なさいます。宮様が御覧になりません折にお目にかけて下さいまし」と、年の始めに言忌もようしないで、縁起でもない泣きごとをながながと愚かしく書きつらねてありますので、繰り返し繰り返し、不思議そうに御覧になりまして、「もうおっしゃってもよろしいでしょう。誰の文です」と仰せになりますと、「昔あの山里で召し使っておりました人の娘が、

イ、正月初卯の日の祝いに用いて邪気を払うもの。桃の木または玉、犀角、象牙などで、一寸四方、長さ三寸から五寸ぐらいの立方形を造り、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

縦に穴があって五色の糸を貫き垂れる

ロ、この木はまだそう古い木ではございませんが、若君のおために心から長寿をお待ち申している松の木であると御承知願わしゅう存じます。「まだふりぬ」に「またふり」（股になった木の枝）を、「まつ」に「待つ」と「松」を利かしてある

仔細がございまして、この頃あそこに参っていると聞いております」と申されるのでしたが、どうも普通の奉公人とは受け取れない文の書きようであるのと、「あの恥かしい、恐ろしい目」などと記した文句があるのとで、さてはとお思い合わせになります。卯槌が面白く、いかにも暇を持て餘している人の仕業のように見えます。股になった木の枝に、藪柑子の実を拵えて刺し通して添えてありまして、その枝に、

まだふりぬものにはあれど君がため
深きこころにまつと知らなん

と、取り立ててどうということもない歌ですのに、あの忘れられない人のかとお思いになりますと、おん眼が留まって、「返事をしてお上げなさい。なさらないのはあんまりです。何もお隠しになるような文でもありますまいに、どうして御機嫌が悪いのでしょう。では私は失礼しますよ」と仰せになってお立ち出でになります。女君は少将などを相手になすって、「困ったことになりました。あの小さい児が受け取ったのを、どうして誰も見ていなかったのでしょう」などと小声で仰せになります。「見ておりましたら、何でお前へなど参らせましょう。いったいあの児は心なしの出過ぎ者なのでございます。行く末が案じられます。人はおっとりとしましたのがよろしゅうございますね」などと憎らしがりますのを、「まあまあ、幼い者を摑えて腹を立てるものではありません」と

仰せになります。その児は去年の冬、人がこちらへ差し上げた童なのですが、顔が非常に美しいので、宮もたいそう可愛がっておいでになるのでした。

宮は御自分のお部屋へ戻っていらしって、おかしなこともあるものよ、大将が宇治へ通われることは、久しい前からずっと続いているとは聞いているものの、こっそりお泊りになることもあると人が言うのを、いかに亡きおん方の形見のお住居だからといって、ああいう所に旅寝をされるとはあまりなことだと思っていたのだが、さてはあのような人を匿っておられたのだなと、思い当り給う点もありましたので、御学問のことで出入りをさせていらっしゃいます大内記の官にある者の、大将の君とも親しく願っていますのをお思い出しになりまして、お前に召します。と、大内記がやって参ります。韻塞ぎをなさるからと仰せられて、詩文の集などを選び出してこちらの厨子へ積んでおくようにお言いつけになりまして、「右大将が宇治へ行かれるのは、この頃も相変らずであろうか。立派な寺を建てたという話だね。ぜひ見に行きたいものだが」と仰せになりますと、「たいそう貴く、厳めしくお造りになりまして、不断の三昧堂のことなどにつきましても、有難いお申しつけがございましたように伺っております。お通いになりますことは、去年の秋ごろからは前よりも繁くおなりになりました。下々の者どもが内々で申しますのには、『女を匿っておいでになる。まんざらでなく思し召すお人なのであろう。あのあたりの所々の御領地の人が、皆仰せを受けて

イ、常住不断に念佛を唱えて専心勤行するための堂

ロ、夕露

お伺いして、御用を承っているが、それらにお言いつけなされて宿直をおさせになり、京からも目立たぬように何かとお世話をしていらっしゃる。どういう幸福人が、さすがに世間体を憚って、あいう田舎に寂しく暮していらっしゃるのであろう』などと、ついこの十二月頃に申しておりましたとやらでございます」と申し上げます。いいことを聞いたとお思いになりまして、「その人が誰だということは聞かなかったかね。前からあそこに住んでいる尼をお訪ねになるのだという話だったが」「尼は廊の方に住んでいるのでございます。その人は今度お建てになりました方に、小ざっぱりした女房などを大勢置いて、相当に体裁よく暮しているのでございます」と申し上げます。「面白いことだね。どういうつもりで、どういう人をそんな風にしておかれるのであろう。やはりなされ方に趣があって、普通の人とは料簡が違っておられる。左大臣などは、あの方があまり佛道に凝って、どうかすると夜も山寺に泊ったりされるのは軽々しいことだと、非難しておいでのように聞いていたし、いかにも、佛道のためなら何もあのように忍んで歩かれることはない、あれはやはり昔の人の故郷に心を惹かれておいでなのだと、いうような噂もあったけれども、実はそういうわけだったのだね。どうだ、人よりは真面目だと言われて賢人ぶっている人間が、かえって世間が思いも及ばない内証事を上手にやっているではないか」と仰せなされて、大層興あることにお思いになります。この内記は、かの大将殿に親しくお仕え申しています家司の婿に当りますので、秘密

になすっていらっしゃることも聞いているのでありましょう。宮はお心の中に、どうしたらその人がいつかの人だということを、確かめることができるであろう、あの君がそうまでにして匿っておくからには、並大抵な人ではあるまい、こちらの人と懇意な間柄なのは、どういう引っかかりなのであろう、こちらの人が大将の君と気脈を通じて隠していらっしゃることなども、ひどく妬ましく思われる、と、この頃はただそのことばかりを思い詰めていらっしゃいます。

賭弓だの内宴だのということが済んでしまいますと、何の御用もありませんし、司召などと言って人々が騒いでいましても、御自分は一向そういう方には心をお留めになりませんので、忍んで宇治へお越しになりますことばかりを思案していらっしゃいます。この内記は立身の望みを抱いて、何とか御意に入るようにと夜昼心を砕いていますので、例になく目をかけておやりなされて、「どんなにむずかしいことでも、私のいうことなら計らってくれるであろうか」などと仰せになります。「畏りました」とお受け申し上げます。「妙なことを言うようだけれども、その宇治にいるという人は、ずうっと前に私がちょっと逢ったことがあって、その後行くえが知れなくなっていた人なのを、大将が捜し出して引き取っておられるらしく、聞き込んでいることがあるのだ。でもしっかりしたことは突き止める術がないので、物蔭から覗くなり何なりして、そうに違いないかどうか見定めたいと思うのだ。微塵も人に感づかれないでそうするのには、どうしたらよかろう」と仰せにな

イ、正月十八日の宮中の儀式。「匂宮」二二五頁頭注ト参照
ロ、正月二十一日の儀式。「紅葉賀」五一頁頭注ロ参照

ハ、亥の刻から子の刻までの間。今の午後十時から十二時頃

りますので、これは厄介なことになったと思いながらも、「おいでになるのでございましたら、えらく険しい山越えをなさらなければなりませんが、格別遠い道ではございません。夕方お出ましになりまして、亥子の刻にはお着きになるでございましょう。そして明け方にはお帰りになれましょう。知る者と申しましては、ただお供を申し上げます者どもばかり。それとて深い事情などは分るはずがございません」と申し上げます。「そうであろうとも。あそこは私も以前一二度行ったことのある道なのだ。いかにも軽々しいという非難を受けそうに思うので、世間への聞えを憚っているわけなのだ」と仰せなされて、返す返すもしてはならないことのように、御自分でもお思いになるのですが、ここまで話をお進めになりましたので、思い止ることもおできになりません。お供には、昔もお供をしてあそこの勝手を知っていました者が二三人と、この内記と、それにおん乳母の子の、今度蔵人から五位に叙爵された若い男など、気心の分った者ばかりをお選びなされて、「今日明日のうちなら大丈夫大将はお越しにならないでございましょう」などと、内記によく様子をお聞きになりまして、お立ち出でになりますにつけてもあの頃のことがお胸に浮かびます。あの時分は不思議なくらい気が合って、自分を手引きしてくれたものだのに、その人に対して後暗いことをするようになったものかなと、あれを思いこれを思いなさるのですが、都の中でさえむやみなお忍び歩きなどは、そうはいってもおできにならないお身の上ですのに、怪しくお姿をお窶しなされて、お馬

でお出かけになりますので、空恐ろしい心地がして、気が咎めるのですけれども、物好きという方は並外れていらっしゃる御性分のことですから、山道を深く分け入るにつれて、早く逢いたい、どうなるであろう、せっかく行っても顔も見ないで帰って来るようであったら、どんなに寂しく、みじめであろうなどとお思いになりますと、胸騒ぎがなさるのです。

法性寺のあたりまでは御車でおいでになりまして、お馬はそこからお召しになりました。道を急いで、宵が過ぎた時分にお着きになりました。内記は勝手をよく知っているかの殿の内の人に聞いておきましたので、宿直人のいる方には寄らないで、葦垣で囲ってあります西面を、そうっと少し毀して中にはいりました。さすがに自分もまだ初めての場所ですから、様子が分らないのですが、人目も少いことですから奥へ忍んで行きますと、寝殿の南面にほの暗い灯影が見えて、そよそよと衣ずれの音がしています。お前へ戻って参りまして、「まだ人が起きているようでございます。ついここからおはいりなされませ」と案内をして、お入れ申します。宮はこっそりと上って、格子に隙間のあるところを見つけて寄っていらっしゃいますと、伊豫簾がさらさらと鳴りますので、はっとなさいます。普請が出来上ったばかりの御殿で、新しくて清々しいのですけれども、まだ細々した所までは手が届かないで、方々が透いていますのを、まさか覗きに来る者もあるまいという油断から、塞ぎもせずにあるのでしょう。几帳の帷を上へ撥ね揚げて、横の方へ押し退けてあります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com